



川上 陽介  
日本近世文学  
中国白話文学

## 年賀状

メールや SNS の普及に伴い、「年賀状じまい」の動きが活発になっているが、私自身は、これまで続けてきた年賀状をやめるつもりは全くない。もっとも、私の場合、そもそも印刷のみの形式的な年賀状は、生まれてこの方、一度も送ったことがない。毎年、年末年始の挨拶として、気心の知れた 20～30 名の知人・友人・恩師等に、手書きの漢詩（狂詩）を送っているだけである。

とはいえ、学生時代の私は、自作の漢詩（狂詩）を完成させる技量など持ち合わせてはいなかった。今回、折角の機会なので、私が年賀状と称して漢詩（狂詩）を作るようになったのはいつ頃のことなのか、USB メモリに保存していた草稿データを引っ張り出して確認したところ、2011 年正月（当時 42 歳）の年賀状に、初めて登場していたことが判明した。

偶成 光陰庚寅似箭飛，辛卯辛苦新年來。明月幾時有團圓，但願萬事如意耳。

（意識） たまたま思い付いた漢詩のようなもの

「光陰」矢の如しと言うように「庚寅（こういん）」の年は、あっという間に過ぎ去った。

2011 年は「辛卯（しんぼう）」の年、あちゃあ、「辛苦」の「新年」が来てしまう。

蘇軾の詞「水調歌頭」にあるように、月も世も、大団円を迎えられるのはいつの日か。

ただただすべてがうまくいくことを、心の底から願うのみ。

ちなみに私が作る詩は、現代中国語で音読すると、文字を見なくても、耳で聴いただけで素直に流れていくような、平易明快な表現を目指している。もちろん、この第一作には「引用」と「ダジャレ」が多すぎて、「習作」程度のレベルにも達してはいないが、記念すべき処女作として、恥ずかしげもなく開陳した。

その翌年、私は晴れて本学に着任し、富山での新生活が始まった。

漫成 壬辰認真終有效，癸巳到來鬼倒死。群山聳立得新生，從此開始富山囂。

（意識） ふと思い付いた詩のようなもの

「壬辰（レンチエン）」の年、「認真（レンチエン）」＝「真面目」に努力した甲斐あって、富山県立大学に就職することができました。新年は「癸巳（クイスー）」の年ですが、「鬼（クイ）」は「死（スー）」＝「死んだ」と言うことでしょう。さあこれからは、立山連峰の聳え立つ、富山での新生活が始まります。やったあ、めでたい。わっはっは。

さて最後に、今年の最新作を紹介する。2026 年は丙午（ひのえうま）の年。60 年前の 1966 年、120 年前の 1906 年、いずれも出生率が極度に低下した「曰く付き」の 1 年である。また、年末には富山県内でも熊の出没が相次ぎ、さらには日本国内のパンダがすべて中国に返還されるという残念なニュースも飛び交った。それでも私は世界平和を祈念したい、だが、私 1 人の力では、なかなか思い通りになるものではない…という気持ちを、干支の馬に寄せて詠んでみた。

大熊來了熊貓走，萬事如意不簡單。（熊は出没パンダは帰国、世の中、思うに任せぬもの。）  
馬耳念佛沒有用，普京不放胡蘿蔔。（天に祈りを捧げても、プーチンの耳に念仏か。）